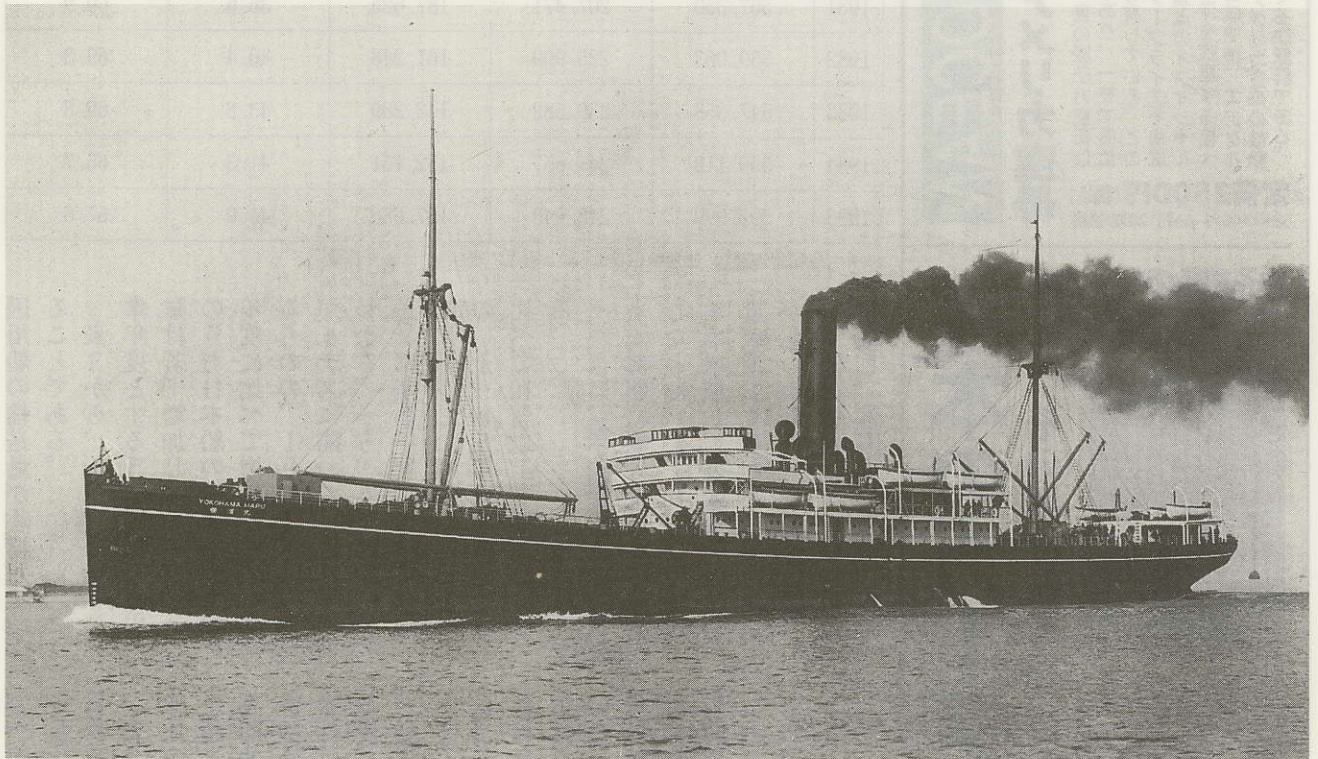


# 野口英世博士が 15年ぶりの 帰国時に 乗船



(上右) 野口英世と母シカ (野口英世記念館提供)  
(上左) 横浜の旧細菌検査室 (筆者撮影)  
(下) 横濱丸



## 横濱丸

《主要目》 貨客船、日本郵船所有、6,469総トン、7,850重量トン、垂線間長121.9メートル、型幅15.2メートル、主機3連成汽機2基(2軸)、出力5,510馬力、最高速度15.2ノット。旅客定員1等28人、3等258人。明治45年(1912)5月三菱長崎造船所で竣工。昭和17年(1942)3月ニューギニア沖で空爆により戦没

## 母から息子への手紙

はやくきてくたされ。いつくるトおせて(教えて)くたされ。これのへんちち(返事を)まちてをりまする。ねてもねむられせん。

母から息子への手紙の末尾部分である。

文中「はやくきてくたされ」が4回も繰り返される。息子とは、米国で細菌研究を続けていた野口英世博士。母は老母シカ。

無学だったシカは、幼いころ習った字を思い出しながらこれを書いた。文章と字は稚拙だが、息子への愛情と、会いたい一心が伝わってくる。手紙は現在、猪苗代湖畔の博士の生家に隣接する記念館に展示されている。

博士が渡米したのは明治33年(1900)12月。満24歳のときである。そして、ロックフェラー医学研究所の大医学者として一時帰国したのは大正4年(1915)年9月。博士は満38歳になっていた。その間、15年もたっている。60代の老母が、外国で成功した息子に会いたかったのも無理はない。

博士の帰国の目的は、帝国学士院恩賜賞の授賞、講演など学術的なものだったが、帰国を決定したきっかけは、この手紙である。

2か月間の帰国中、博士は講演旅行のときに母をとめない、関西を案内した。生まれて初めての親子の旅で、母シカは、それまでの

苦勞を忘れたことだろう。母はその3年後、スペイン風邪がもとで世を去っている。

## 「横濱丸」で堂々の帰国

故郷に錦を飾った博士が、米国から横浜まで乗った船。それがシアトル航路の定期船「横濱丸」である。大正4年9月7日付『東京朝日新聞』に次の記事がある。

邦人にして世界医学界の天才を以て目ざるる野口英世博士は五日午後五時横浜着の郵船横濱丸で満十五年振に帰朝した。同博士の旧恩あるドクトル渡辺鼎、血脇齒科病院長其他の知人旧友と共に十数名の記者達が一斉に此若い博士を包囲した。(原文は旧漢字)

渡辺医師は、博士の左手を手術した会津若松の会陽医院の院長。博士が1歳のとき、囲炉裏に落ちて大火傷をした話はよく知られている。前述の『東京朝日新聞』には、「横濱丸」の1等ダイニングサロンで記者会見をする博士の写真が掲載されている。

「横濱丸」は、明治末年、日本郵船がシアトル航路用に三菱長崎造船所で建造した貨客船である。船型は遮浪甲板をもつ平甲板型。郵船の船では珍しい船型で、川崎造船所に発注された「静岡丸」と同型である。

博士が乗船したころのシアトル航路には、6隻が就航し、2週1便の運航をおこなっていた。「横濱丸」「静岡丸」は、6隻中の最新の船である。ちなみに、乗船した年の前年には、第1次大戦が始まっている。

昭和7年(1932)、同航路から撤退。南洋諸島航路への定期船となった。そして、太平洋戦争の開戦直前に陸軍が徴用。開戦の翌年、ニューギニア上陸作戦に従事中、大空襲を受けて被弾し、30年の船歴を閉じた。

博士と横浜のかかわりをもう一つ紹介しよう。ペスト発見の話である。

明治31年(1898)に北里伝染病研究所の助手をつとめた博士は、翌32年5月、短期間だが、横浜海港検疫所の医官補となった。その翌月、香港、長崎、神戸をへて横浜港外に着いた北米航路の客船「亜米利加丸」の船内に、高熱で危篤状態の船員2人がいた。

臨検した星野乙一郎医官と野口医官補は、ペストと直感。採血の結果、ペスト菌を発見した。「亜米利加丸」は消毒、隔離された。一連の処置にあたり、新進気鋭の野口医官補が活躍したことは、いうまでもない。

現在、横浜市金沢区長浜に、横浜海港検疫所の細菌検査室が記念保存されている。博士の勤務当時の建物で現存しているのは、この小さな木造建築物だけである。

山田 迪生